

キ 道祖神とその由来

藤沢の文化財―石仏を訪ねて―（藤沢市教育委員会）より

道祖神（どうそじん・どんど）は、塞の神（さえのかみ・さいのかみ・せえのかみ）ともいい、村や集落の出入り口、あるいは辻や路傍・畦道に祀られています。

男女二神仲睦まじく寄り添っていたりしますが、どんな神様かとなると、良く解らない石仏なのです。疫病神や悪魔等邪霊の侵入を防ぐ神、良縁を得させ子供を授けてくれる神、作物を豊作にしてくれる神、目や耳の病気を治してくれる神、行路の安全を守ってくれる神で、旅人がそれに手を合わせ道中の無事を祈りつつ安全に旅し、道行く人を災難から守る神（みちの神・道中の安全を守る神）等さまざまですが、その地域に住む人々の生命・財産を守り、子孫の繁栄を司る最も身近な神として、信仰されていたと思われます。

また、金も権力も持たない庶民にとり、老若男女が皆その徳を讃え、幸せを願った神で、村人が安心して静かで幸せに暮らせるように、祈願して祀られています。

ある書によると「祖人たちは自然と人間を創造し、また、それを支配されるものは神様であると信じていました。さらに人間に何らかの影響を与える現象までも、神様が行われるものであると考えていました。」とあります。道祖神は私たちに一番身近な神なのです。私たちは、その道祖神の前を意識せずに、ふと通りすぎるとき、なにかを感じ謝して無意識のうちに手を合わせたくくなります。道祖神には私たちには知れない、何か奥深い魅力があるのでしょうか。

昔の庶民は、ほとんどが紙に文字や絵を残していません。しかし、石仏には、文字が刻まれていて、だれが（人名・講名）、いつ（年月日）、どこで（村・字名）、なにを（信仰の対象）、どのように（勧進・寄進）などを読み取ることができます。この石仏に刻まれた文字（銘文）は、石仏が私たちに語ってくれる祖先が残した「生の歴史」でもあります。現代に生きる私たちには、この石仏に託された、祖先のメッセージを次世代に引き継いでいく責務があると思います。

造塔には、自然石では、丸いもの・陰陽を思わせる形のものなど神体として用いられ、人工的では、像を彫ったもの・文字を刻んだものなどがあります。

単体道祖神・双体道祖神・道祖神祠・自然石道祖神・文字入り〔道祖神〕道祖神塔などさまざまです。

また、1月14日には、この道祖神のところで各集落毎に「だんご焼き・どんど焼き」が行われます。各家々では前日の13日に、米の粉で白・赤・緑等の色々な色で丸い団子や俵・里芋等の農産物を真似てつくり、神棚へ上げます。当日のだんご焼きには、針金にだんごを通し、さお竹の先に付けて焼きます。書き初めに書いた紙やお正月飾りの神棚の飾り・お札を燃やしながら、この一年の無事を祈り合います。

平塚市の調査によると、旭南部・土沢地区（いわゆる市西部地区）の石仏一覧では、59基の道祖神があり、そのうち24基（全体の40%）が土屋にあります。

ここでは、土屋における各集落単位の主な道祖神をあげました。

（注）像 塔：石仏の中の神仏の像を彫ったもの

文字塔：石仏の中の文字を刻んだもの

庚申塔：庚申信仰は、道教に由来するとされ、人体には「三尸（さんし）」といわれる虫が宿り、庚申の夜に抜け出して、天帝（帝釈天）にその人の罪

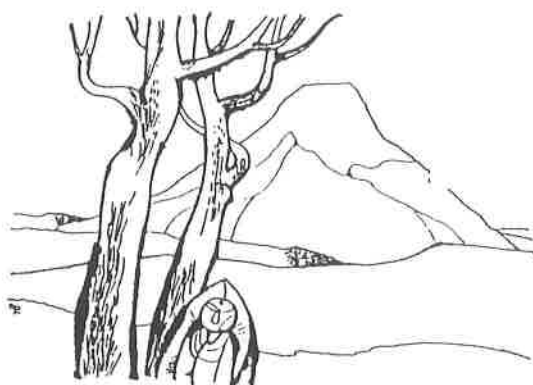
過を報告し、天帝はそれによって寿命を縮めるというもので、三尸虫の上天を防ぎ長生きするために、庚申の日には身を慎み、皆で一夜を眠らずに過ごす習わしが生じたといわれています。また、日本古来の祭りで一夜神前に参籠する「日待ち」をして、五穀豊穡・除災・延命を祈願するなどの説があって、定かではありません。ただ明らかなことは、庚申の年の、庚申の日を縁日とすることです。

庚申の「庚」は十干の七番目の「かのえ」、「申」は十二支の「さる」に当たり、いわゆる「かのえさる」で、この両者の組み合わせは、60日に一度、年では60年に一度回ってきます。庚申塔には「猿」が彫られています。

(参考) 十干 (じっかん) 十二支 (じゅうにし)

十干：甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の称。これを五行（木・火・土・金・水）に配し、陽即ち兄（え）と、陰即ち弟（と）をあてて、甲（きのえ）・乙（きのと）・丙（ひのえ）・丁（ひのと）・戊（つちのえ）・己（つちのと）・庚（かのえ）・辛（かのと）・壬（みずのえ）・癸（みずのと）などと訓ずる。普通十干と十二支とは組み合わせて用いられ、干支（かんし）を「えと」と称するに至った。

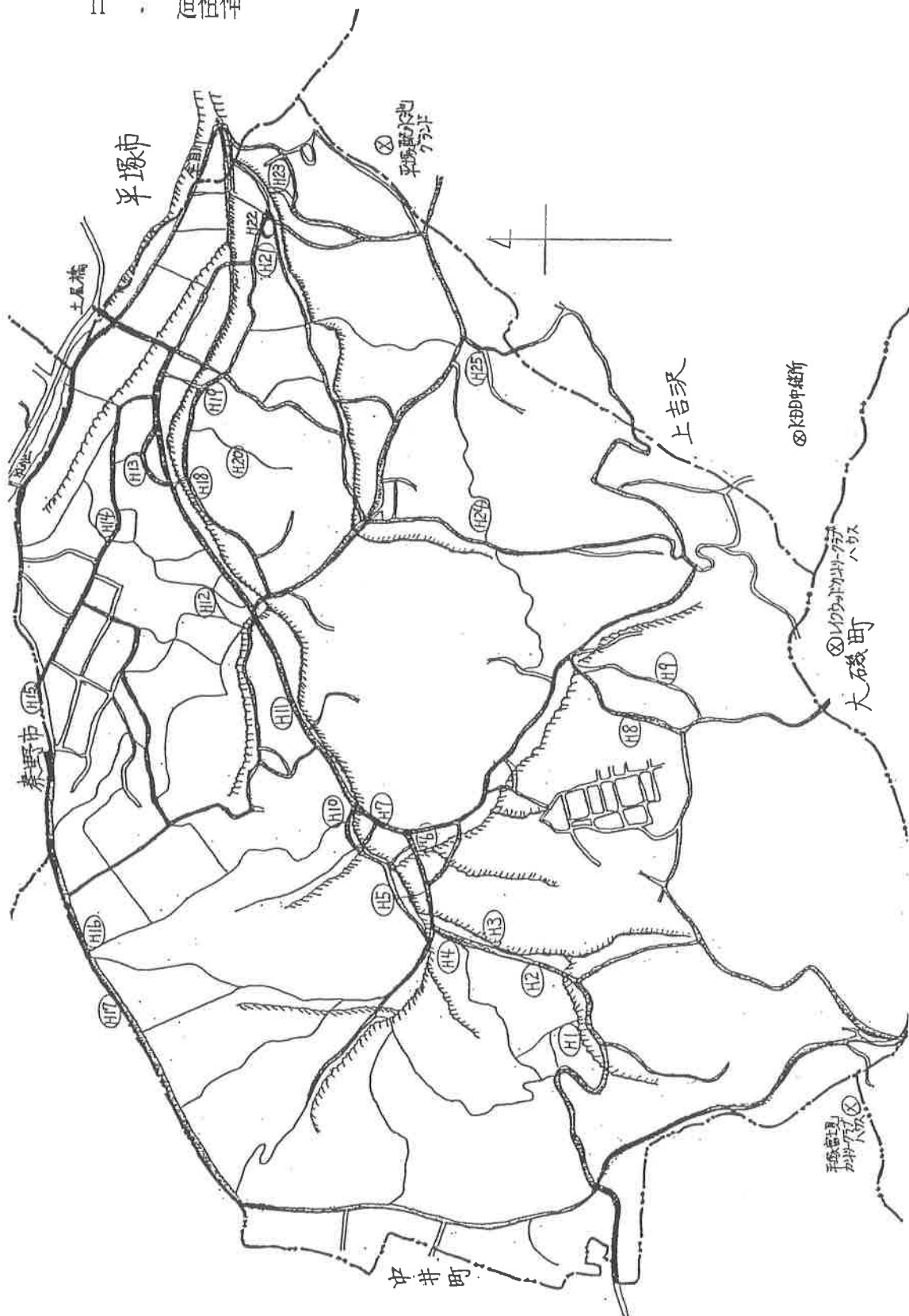
十二支：子（ね）・丑（うし）・寅（とら）・卯（う）・辰（たつ）・巳（み）・午（うま）・未（ひつじ）・申（さる）・酉（とり）・戌（いぬ）・亥（い）の称。



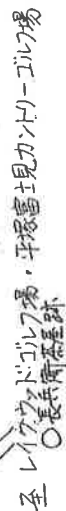
(注) 調査結果では、ほとんど五輪塔が完全な姿ではありませんでしたが、配置の状況から判断して、基数を数えました。

地 区 名	H -	所 在 地	単体	双体	五輪塔	道祖神	その他
上惣領	上屋中川中手 H-1	4678番地付近		1	1		
	下屋・中入 H-2	3950番地付近		1			元文4年
	中 入	H-3 3928番地付近				1	
		H-4 4021番地付近				1	大野氏3軒
惣領分	上 谷	H-5 3167番地付近				2	
	八坂下	H-6 3146番地付近			5		セイノ神1
	八反田脇	H-7 3119番地付近				1	
	琵琶	H-8 2779番地付近			7		
		H-9 2664番地付近			2		中村氏他2軒
上庶子分	H-10	800番地付近			3		セイノ神2
中庶子分	H-11	998番地付近		1	4	1	平成3年
下庶子分	H-12	1152番地付近			2	1	大正15年
	H-13	1222番地付近			2		
小 熊 (下大槻)	H-14	211番地付近		4	1	1	明治35年
	H-15	321番地付近			15		地藏6
遠藤原 下分	H-16	584番地付近		2			
上分	H-17	617番地付近		1	2	1	牛頭観世音
寺分上	H-18	1805-1番地付近				1	
	H-19	1229-11番地付近				1	
	H-20	1786番地付近					石祠(稲荷神社) (オシャモツアソ)
寺分中	H-21	1473番地付近			1		観世像塔1
寺分下	H-22	1482番地付近		1			庚申塔1
	H-23	1524-2番地付近				1	堅牢地神1
早田	H-24	2305番地付近		1	9		石祠 1
人増	H-25	2492-1番地		2	1	6	地藏尊彫像 地藏尊
				徳本供養塔・自然石道祖・庚申塔			

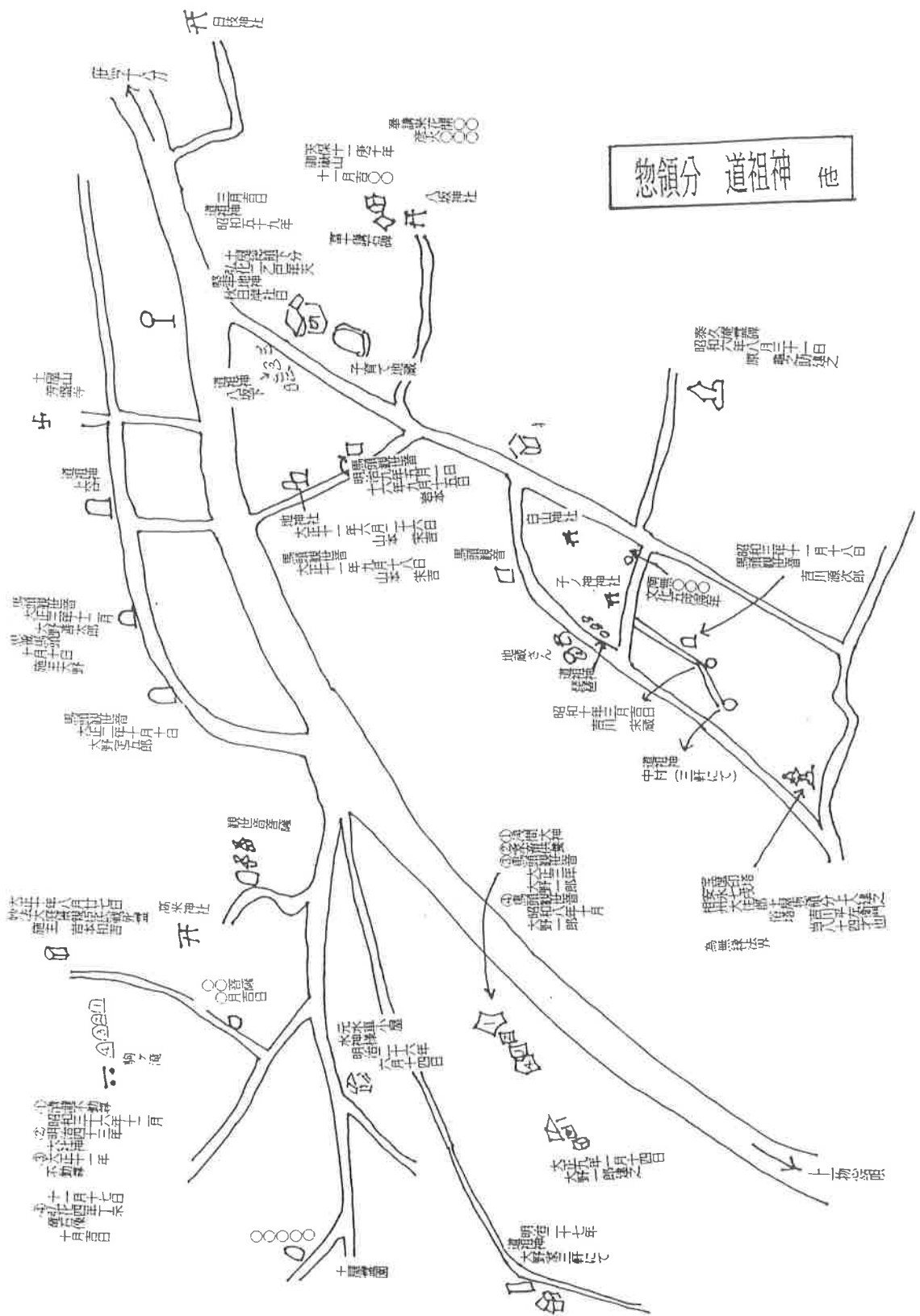
H : 道祖神



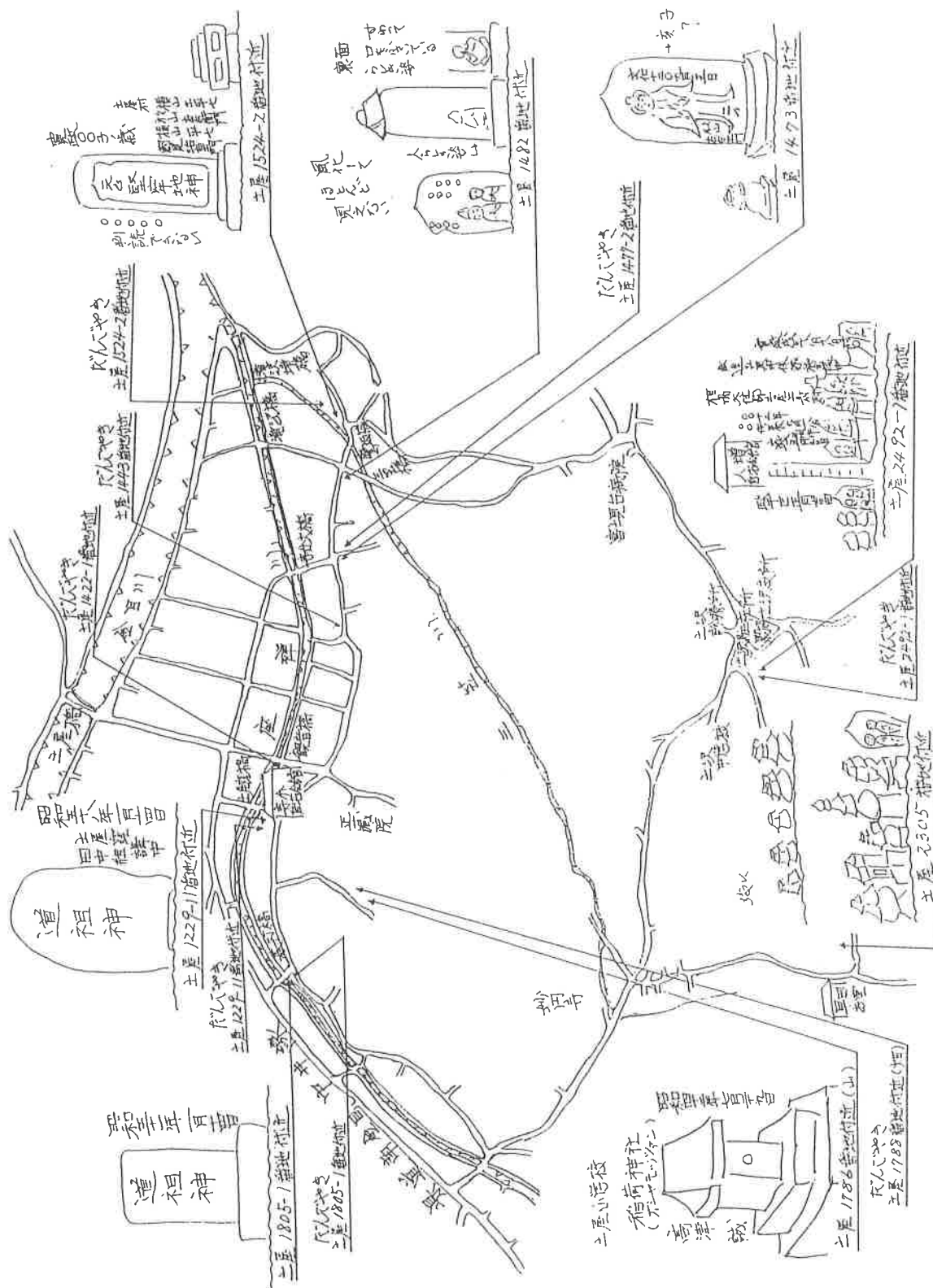
4



惣領分 道祖神 他



太寺分，道祖神，他



[由来]

・小熊の道祖神（H-14）と矢沢の道祖神

〔神奈川新聞「神奈川の道祖神」＜69＞昭和51.12.17より〕

北に金目川の流れを臨む小高い丘陵地の一角に、江戸時代そのままと思えるような農家の集落があります。ここが土屋小熊で、集落の入り口付近に設けられた祭祀場（さいしば）の種々雑多な石造物から推定しても、この集落が古い歴史を持つ部落であることは容易に判断できます。さて、道祖神ですが、先の石造物が祀られたところから、20mぐらいの集落の中に入った右側の土手の上に五輪の塔などとひとかたまりになって奏祀されています。

数は全部で四基あります。しかし、このうち二基は、完全に摩滅していて、とても鑑賞できる状態ではありません。残る二基の道祖神のうち一基は、これも摩耗著しいが、それでも有冠の袖（ゆう）中合掌像であることぐらいは分かります。さて残る一基の道祖神は、有冠の神像双体像で、前の道祖神とは比べものにならないほど出来もよく立派です。左手に御幣を持ったおかめ顔の女神がつえをつき、不動明王のように目をつり上げ、内でこらえた怒りが今にも爆発しそうな顔をした男神の肩を、右手で抱きかかえ、慰めるようにしているのが、何ともユーモラスであります。しかし反面この神像の笑いと怒りの裏には、何か不気味な要素を含んでいるように思えてなりません。それは一つに、あの土俗信仰が持つ独特な泥臭さが深くかかわっているからであります。

くし型の光背に銘が刻まれてあります。「明治35年1月建」。明治35年は1902年で、日本が日清戦争を経て、日露戦争に突入する2年前です。

（中略）

また、鑑賞できるのは、土屋矢沢のこれも有冠袖合掌型の道祖神ぐらいです。

（中略） 矢沢の双体像には、いまからざっと235年前の「元文5年（1740）庚申（かのえさる）4月吉日」の銘が刻まれています。

なお、小熊のだんご焼きは、昔は風向きにより、土屋76番地付近・土屋335番地付近の道端で行っていましたが、現在は土屋374番地（木村植物園焼却場の一角）で行います。

・上惣領（矢沢）の道祖神（H-1）（H-2）（H-3）（H-4）

この地区の道祖神は、4か所あります。上屋・中川・中手・下屋の集落では、天宗院の北側の愛宕神社へ通ずる入り口に、双体道祖神1基と五輪塔1基（一部欠落）が、下屋の集落と中入の集落の境に、双体道祖神1基（元文4年）が、また、中入の集落では二つに分かれ、ひとつは、県道77号線から左へ坂を下り、座禅川に架かる「中入橋」を渡った、中入の南側の集落の入り口すぐ左手に、道祖神石碑「明治二十二年一月十四日谷沢村」1基、もうひとつは土屋霊園入り口から旧道（久保から愛宕山へ登っていく道）を少し入った林の中の坂の途中に、中入の分かれで大野家3軒で祀る道祖神石碑「道祖神明治二十七年一月」1基と五輪塔の一部があります。この道祖神は、上惣領（矢沢）中入と惣領分上谷の集落境にあります。

中入の集落では、だんご焼きを道祖神の側で行いますが、上屋・中川・中手・下屋の集落では、最初道祖神のある場所が県道よりのお寺の下で、どんどん火を燃やすの

で、寺に火が移るといけないということで、控えて燃やしていました。そのうち、少し離れた県道沿いの、石黒俊彦氏宅の入り口で、行われるようになりました。

また、下屋と中入の集落境にある双体道祖神（元文4年：1739年）では、下屋と中入の人たちが、ここでだんご焼きを行います。

・惣領分上谷地区の道祖神（H－ 5）

上谷では、上谷・中庭・久保の集落が、一か所の道祖神を祀っていますが、この他に大野家3軒（大野光治氏・大野豊氏・大野ヤス氏）で独自で道祖神を祀っています。

〔中入と重複〕

上谷の道祖神は、石碑に「道祖神」と刻まれ、山すその岩盤をくり抜いた祠に、ひっそりと祀られています。だんご焼き（どんど焼き）は、道祖神に近い田んぼで行います。

なお、惣領分では大野光治氏宅を「上屋敷」（かみやしき）、大野義雄氏宅を「中屋敷」（なかやしき）、脇下組の原氏宅を「下屋敷」（しもやしき）と呼んでいます。

・惣領分八坂下地区の道祖神（H－ 6）

この道祖神は、五輪塔が5基とセイノカミ（石造男性自身）〔破損中〕が1基あります。だんご焼きは、人家を避けた所で行います。

また、県道77号線のバス停「琵琶入り口」より琵琶方面へおよそ100m入った左側の高台に、「堅牢地神」の石祠があります。屋根の造りもだいぶこった物で、正面には、「土屋惣領下分中」、右側には「堅牢地神」、裏面には「弘化二乙巳年天秋彼岸社日」と刻まれています。そして、この「堅牢地神」より少し先に、子育て地藏尊（石造）1体と五輪塔1基があります。

この地藏尊には、「道○禅定門 慶安二己丑年」と刻まれています。他は判読できません。ここは、ちょうど惣領分の鎮守である八坂神社の西側の山中にあたります。

（注）・慶安二己丑：1649年

・弘化二乙巳：1845年・仁孝天皇・徳川家慶將軍・江戸大火・江戸城本丸修築終

・惣領分八反田脇地区の道祖神（H－ 7）

道祖神の石碑が1基立っています。

だんご焼きは、人家を避けた所で行います。

・惣領分琵琶地区の道祖神（H－ 8）

琵琶の集落から子ノ神神社の前を通り、ゴルフ場のクラブハウスへ向かう狭い坂道を登っていく途中の土手に、7基の五輪塔があります。これが琵琶地区の道祖神で、だんご焼きをこの下の畑で行います。近くには、2体の地藏尊があります。

・惣領分琵琶地区の道祖神（H－ 9）

琵琶の集落からゴルフ場のクラブハウスへ向かう坂道の左側（H－8より200m

先の東側の杜鵑山のゴルフ場内)に、2基の五輪塔があります。また、ここには、中村氏の稲荷神社もあります。だんご焼きは、1月14日に中村氏他2軒で行います。

・上庶子分の道祖神(H-10)

十二社のお堂にあります。五輪塔はいずれも完全なものはありませんが、3基として数えられます。また、惣領分八坂下地区と同様にセイノカミ(石造男性自身)2基があり、中でもその内の1基は、破損はあるもののほぼ完全な形で残っています。

だんご焼きは、近くの空き地で行います。

なお、お堂の周りには、つぎのような供養碑が立っています。

・奉納大乘妙典日本〇國供養塔 功德有餘普益群迷 善根無涯廣利砂〇

天明五乙巳十月吉日 武州足立郡横園村生 願主 一行浄心

・〇悟浄心從德 文化八辛未年二月初六日

・蓮道從德信 文政二己卯年四月十七日 今里村 平左エ門伯父

(注)天明五年:1785年・文化八年:1811年・文政二年:1819年

・中庶子分の道祖神(H-11)

文字入り道祖神石碑1基・双体道祖神(夫婦道祖神)が1基・五輪塔が4基あります。だんご焼きは、その道祖神の前で行います。

中庶子分自治会館には、半鐘が1基あります。

「相州大住郡土屋郷庶子村地藏堂 常什物施主 谷念佛講中 願主信誓

寶曆八戊寅天五月吉辰 江戸西村和泉守作」と、刻んであります。

(注)谷念佛講とは、上・中・下庶子分の総称を「やと」といい、その念佛講です。

(注)寶曆八戊寅:1758年

・下庶子分の道祖神(H-12)

字寺田・字高神山に居住する人で、道祖神を祀っています。道祖神の性格上集落と集落の境にありますので、ここでは中庶子分と下庶子分の人が係っています。道祖神の場合は、必ずしも各集落単位とはいえません。

文字入り道祖神石碑1基・五輪塔が2基あります。だんご焼きは、その道祖神の前で行います。

・下庶子分の道祖神(H-13)

字木舟の袖切り坂を、土屋台の集落へと上がっていく入り口の角にあります。

袖切り坂については、2.土屋の地理(2)歴史地図 エ 道路・坂とその由来 で説明してありますが、相当急な坂で、左右に三つの曲がりがあり、土屋台へと至ります。登り切った左手の小高い丘に、木村家の稲荷様が祀られています。

だんご焼きは、その道祖神の前で行います。

・遠藤原の道祖神(H-16)

双体道祖神(夫婦道祖神)が2基あります。

だんご焼きは、道祖神が民家に近いので、危険のため近くの自治会館前で行います。

・寺分上の道祖神（H－18）

碁打橋付近に、「道祖神 昭和五十一年一月十四日」と刻まれた石碑があります。
だんご焼きは、この道祖神の近くで行います。

・寺分上の道祖神（H－19）

土屋窪橋の袂（寺分自治会の側）に、「道祖神 土屋窪 田中組講中 昭和五十八年一月十四日」と刻まれた、自然石でできた道祖神があります。

だんご焼きは、近くの田んぼで行います。また、この他に観音橋近く（土屋1422－1番地付近）の空き地でも行います。

・寺分上の道祖神（H－20）

土屋窪の高津誠氏宅近く（土屋1786番地付近）に、昭和42年7月29日に石祠が再建された稲荷神社（オシャモツツアン）があります。毎年1月15日に、近所の人たちとだんご焼きをしていましたが、近年は高津家のみで行っています。

だんご焼きは、この道祖神の近く（土屋1788番地・畑）で行います。

・寺分中の道祖神（H－21）

粟久保へ向かい、寺分大橋を渡って少し行ったT字路に、道祖神があります。

五輪塔1基と観音像塔「文化十二年乙亥九月五日 杉山友右エ門」（彫像）1基があります。だんご焼きは、この道祖神の近くの土屋1477－2番地付近で行います。

また、この他に杉山憲三氏宅近く（土屋1443番地付近）の田んぼでも行います。（注）文化十二乙亥：1815年

・寺分下の道祖神（H－22）

粟久保の土屋1482番地付近に、双体の道祖神1基と庚申塔1基があります。庚申塔は風化して文字の判読、彫像の様子ははっきりしませんが、その裏面では申（さる）が座って口を塞いでいる姿がうっすらと分かります。おそらく、正面・側面には申が座って目を塞いだり、耳を塞いでいる姿かもしれません。

ここでは、だんご焼きを行っていません。

・寺分下の道祖神（H－23）

三笠川に架かる鷺坂橋の近く（土屋1524－2番地付近）に、道祖神を祀ったと思われる石造の一部（土台）1基と堅牢地神の石碑1基があります。

土台は、近くの安池氏がだんご焼きの前日に、家に持っていき水で洗い清めて、道祖神の場所へ祀ります。

堅牢地神の石碑には、判読が困難ですが、「堅牢地神 土屋村 横山土平七 杉山友右衛門 横山平七 國身治右エ門 寛政四壬子ノ歳」と刻まれています。

だんご焼きは、この道祖神の近くで行います。

（注）寛政四壬子：1792年

〔参考〕堅牢地神（けんろうじしん）

仏教語で地天ともいいます。八方天・十二天のひとつで、大地を司る神。仏の成道のとき大地より現れて証明（しょうみょう）し、また、仏の転法輪を諸天に知らせるという。その像は、赤肉色で、左手に鮮花を盛った鉢を捧げる。

大地は、万物を背負い担っていますが、疲労せず倦怠することもなく、恩もきせず、そして動揺もしない堅固不動のものとして、この厳めしい名が生じたものと思われます。その御利益は、人の住むところを安穩安楽にし、作物もたくさん採れるようになり、住む人は火の燃えるように盛んになるといわれています。

・早田の道祖神（H-24）

おおまん坂を人増に向かって登って行く途中（早田2304番地）の左手の高台に、早田の道祖神があります。双体道祖神1基・五輪塔9基・石祠1基の構成となっています。双体の道祖神には「享保〇年三月吉日」と刻まれています。他ははっきり判読できません。だんご焼きは、近くの会館前で行います。

（注）享保年間：1716～1735年

・人増の道祖神（H-25）

自治会館には多くの石仏があります。安政4年（1857）の道祖神などがあり、石仏等の詳細は、つぎのとおりです。だんご焼きは、自治会間の敷地内で行います。（自治会館石段下の道祖神等）

・双体道祖神 2基・五輪塔 1基・徳本供養塔（念仏講供養） 1基・地藏尊 1基・庚申塔（奉造立 庚申供養 施主講中 相州大住郡土屋上寺分村 時正徳五未九月下旬）1基・地藏（彫像） 2基・自然石道祖神 1基

（注）正徳（しょうとく）年間：1711～1715年

